

# 古代・中世における共食と身分

Class Consciousness and Practices of Eating Together in  
Ancient and Medieval Japan

原田信男

## ①古代における共食と身分

共食と誓約行為／神々との共食／

大嘗祭における共食／大饗における共食

## ②中世における共食と身分

御成における共食／在地における領主の共食／

村々における共食／古代・中世における共食の構造

### 【論文要旨】

基本的に人々が共同で飲食する場合には、それぞれの構成員の身分や社会関係などが、席次や食事内容などに反映されることが多い。さまざまな身分の人間を抱えて催される祭礼や儀式などでは、特に複雑な人的構成を持つことになるが、同一な身分集団の場合には、比較的単純に同じものを同時に体内に取り込んで、誓約などを行い集団としての精神的な一体化が図られることになる。

前者の場合には、同じような食物でも内容を変え、同じ場所であっても主席からの遠近を遠え、または時間を微妙にずらすことによって、全体としての共同性を保ちながらも、内部でそれぞれの差異を強調して、参加者の身分関係が表現されていた。また後者の場合には、一致団結して強硬な行動に出る一揆などの際に、一味神水などと称して神聖な神の水を一同が一気に飲む、という一種の誓約行為が採られたのである。

小稿では、こうした共同飲食の在り方のうち、特に前者について、①神と天皇、②天皇と貴族、③貴族と武士、④将軍と大名、⑤在地領主と農民、⑥有力農民と一般農民、といったレベルで検討する。すなわち、それぞれのケースについて、古代から中世にかけての身分秩序の在り方が、祭礼や儀式の際における共同飲食の場に、どのように反映するのかを見ていくこととした。

さらに儀式などの際に、身分の高い者から低い者への食物贈与である「下し物」を中心に分析すると同時に、さまざまな贈答儀礼の中に、武力の誇示や衣食住などの保障を象徴するような構造があることに注目する。しかも、上記のような儀式が、それぞれ単独に完結しながらも、実際には重心円的な構造を持って関連し合い、古代もしくは中世社会の身分秩序が、全体として維持されていたことが重要である。